

# OCEAN CRUISE オーシャンクルーズ

No. **1**

社団法人 日本外航客船協会  
**会報**

●発行●社団法人 日本外航客船協会  
THE JAPAN OCEANGOING PASSENGER SHIP ASSOCIATION  
〒102 東京都千代田区平河町2-6-4 海運ビル7階  
TEL 03(5275)3710 FAX 03(5275)3317

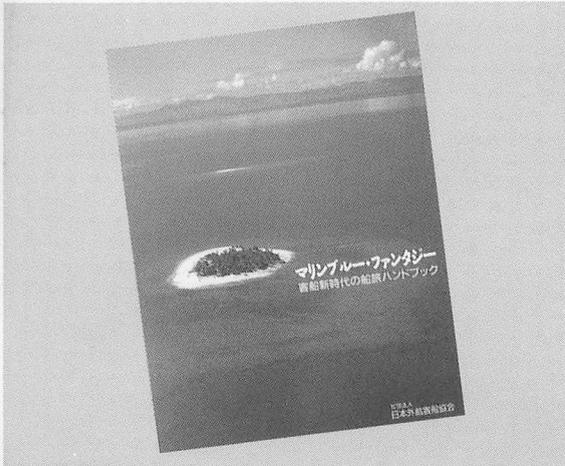
発刊にあたって

## 官民一体の活動で 国民により身近な船旅の実現を



社団法人 日本外航客船協会  
会長 **相浦 紀一郎**

本年4月、当協会が発行した本格的船旅ガイドとして好評の“マリンブルー・ファンタジー”。



日本外航客船協会が昨年5月28日に設立されて以来1年がたち、この度機関誌「オーシャン・クルーズ」発刊の運びとなりました。協会設立の趣旨は、主要な外航客船運航会社が主体となり、関係各業界の皆様のご支援のもと、船旅をより国民に身近なものにしていこう、とするところでありましたが、その後幸いにして全国14の地方自治体のご参加を得て、いよいよ官民一体と成っての活動推進が可能となったことは、喜びにたえません。

この1年間における協会の具体的成果としては、まず第一に「安全運航コード」と「利用者保護コード」の策定があげられます。これらは、今後一層増加するであろう乗客の安全と利益保護を目的とした規範であります。また、船旅のハンドブック“マリンブルー・ファンタジー”を作成し、配布させていただいておりますが、各本船のカラー写真や要目と共に、船旅を楽しんでいただくための各種アドバイスがわかりやすく解説され、船旅愛好者の皆様はもちろんのこと、これからご乗船になろうと考えておいでの皆様にとっても、客船新時代を反映した十分お役に立つ資料になっていると確信しております。

このような協会の活動を、より広く社会にお知らせするものとして、当機関誌の果たす役割は大きいものでありましようが、何分にも産声をあげたばかりでもあり、行き届かぬ点多々あることと存じます。今後3か月に1度の発行を予定しておりますが、できる限り多くの皆様にお読みいただき、お気付きの点やご希望、ご助言をお寄せいただきますようお願い申し上げます。第1号発刊のご挨拶といたします。

# “海”での交流のなかに

社団法人 日本外航客船協会

副会長 入谷 拓次郎

この度(社)日本外航客船協会において、機関誌を発行されることとなり、誠に交流の良き縁となりますことを願います。

本来、人間はこの大自然のなかに抱かれておりながら、その有難さも失ってきている現状があります。もう一步進めて考えてみると、この地球は私達人間を受け入れるために、適した環境をつくりだしているといった方がよいかもわかりません。もともと人間の本質として、自由性をもっており、この自然の営みに呼応して歩むことが自然の姿であります。そのなかで海との関わりも深くなり、海上を利用し交流を深めながら、我々の生活に大きく関与して参り、交通の場の拡大は文明・文化の発展と人間性をも豊かにしながら、新たな喜びを醸しております。

“海”のもっている包容力とロマンを感じさせながら、それぞれの地域のもっている文明・文化の違いに接し、これを介在として互いに理解を深め、意識の高揚に役立ってきたといえましょう。旅客船とし

ても夢と希望とを心に膨らましなが、旅行の途上のなかで、人と人、人と自然の交流に多くの学びを得ることができ、調和された姿に接し、調和のすばらしさを感じとり、自ら人間としての調和のありように自問される機会ともなりましょう。

私共がこの海を介在として営みをしているものとして、この自然の恵みの偉大さを受けとり、人生の意味を味わっていただける時と場を、提供させていただける喜びを感じさせていただいております。

個性をもっている“いのち”としてその大切さを認識しながら、この人間としての時の恵みを共に感じながら、21世紀へむけての新たな秩序と価値観の醸成に手を携えていける協会でありたいと願います。

会員各位の努力と叡知を結集して、利用される方々への糧となりますように努めて参りたいと念願致します。



デッキランチ。  
見えるのは青い海  
ばかり。

# 客船事業の1年を振り返って

運輸省国際運輸・観光局

外航課長 村上 伸夫

近年、わが国でも所得水準の向上や国民ニーズの多様化に伴って余暇の有効利用に対する意識が高まっており、レジャーが日常生活のなかに定着しつつあり、この気運は外航客船旅行の世界にも反映されているように思われます。

わが国における外航客船による海外旅行者は順調に伸びており、昨年1年間の実績で約15万8,000人の日本人が外航客船旅行に出かけております。特に究極のレジャーともいわれているクルーズへの関心は高く、「余暇時代」「高齢化社会」を迎えたわが国において、新しいライフスタイルが見い出せるものとして、今後とも、そのニーズは着実に広がっていくものと思われます。

しかしこれで満足してはいられません。わが国の海外旅行者は年間1,000万人を突破しましたが、そのなかで外航客船を利用した人はわずか1%程度に過ぎません。海洋国家、海運国家である日本としては、今後さらに外航客船旅行の発展に向けた努力をしていく必要があるのではないかと考えます。

このように、外航客船時代の幕開けを迎えたなかで、昨年5月、わが国の外航客船事業者が中心となって(社)日本外航客船協会が設立されるに至ったことは誠に時宜にかなったものであると、喜ばしく思うとともに、今後の活躍に大いなる期待を寄せる次第です。

## 安全の確保と 利用者の保護が最優先課題

運輸省としましては、こうした観点から、運輸大臣の諮問機関である運輸政策審議会において、外航客船旅行の振興を図るための方策について、約1年半にわたり審議を進めてまいりました。審議にあたっては、まず、安全の確保と利用者の保護という基本的な条件を整備することが最も重要な課題であることを確認したうえで、外航客船旅行の日本人利用客の拡大を図るための振興方策についても審議してまいりました。

安全確保、利用者保護の充実について審議する過程で、当面、外航客船の運航事業者が自主的に遵守

すべき準則として、昨年10月、運航管理体制の確保を求めた「安全運航コード」及び運送契約の明確化等運航事業者のとるべき措置等を定めた「利用者保護コード」がそれぞれ策定されましたが、(社)日本外航客船協会では、同11月に早速、これらコードを自主的に遵守していくことを決議され、また、これを受けた協会傘下の会員各社において、早急に所要の対策が実施に移されることになりました。このような迅速な対応は、関連事業者の客船旅行の振興に向けた積極的な取り組みの姿勢を伺わせるものであり、非常に望ましいことと思います。利用者保護コードに定められている事項の実施にあたっては、一部、保険面での環境整備が必要であるものもありますが、同協会が中心となって関係方面との折衝にあたり、早急に所要の整備が図られるよう切に願うものであります。

## アジア・太平洋地域に クルーズ拠点の整備を

外航客船旅行の振興につきましては、わが国周辺海域は必ずしもクルーズに適した海象条件や寄港地としての観光資源に恵まれているとは言い難いことから、フライ&クルーズの振興が重要であると考えられます。

このため、アジア・太平洋地域にクルーズ拠点を整備する可能性を探って、昨年11月と本年4月の2回にわたり、(社)日本外航客船協会及び関係者の方々の協力、支援を得て、ミクロネシア及び東南アジア地域へ視察ミッションを派遣しました。

外航客船旅行の振興を図るうえでの諸問題の解決や同協会及び関係事業者の業務が円滑に推進されるためには、関係各方面との緊密な連携が不可欠であることはいうまでもないことですが、運輸省としましては、今後とも、外航客船事業の発展にできる限りの協力をしてまいりたいと考えております。

最後になりましたが、(社)日本外航客船協会及びわが国外航客船旅行の一層の発展を祈念しまして、設立1周年を迎えた同協会の創刊号に寄せるお祝いの挨拶とさせていただきます。

# 外航クルーズ客船の楽しみ方

運輸政策審議会外航客船小委員会委員長  
成蹊大学教授

谷川 久

わが国もいよいよ平成元年を客船元年とする本格的なクルーズ客船時代を迎えて、これからますます多様化されたクルーズ・メニューが提供されようとしてきていますが、私が経験させていただいたクルーズの実船体験も踏まえて、外航クルーズ客船の楽しみ方を考えてみたいと思います。

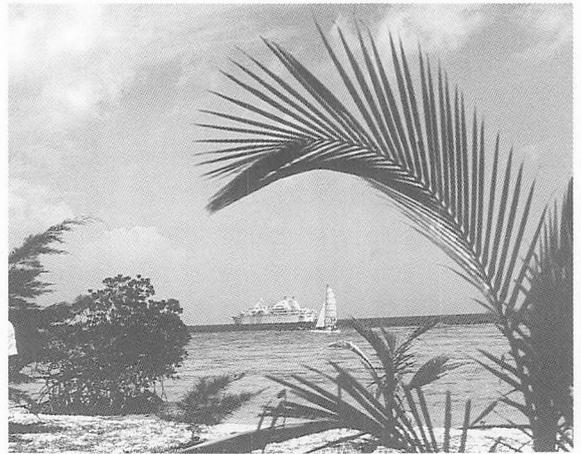
## I. 情報からの隔絶

クルーズ客船の旅の楽しみは、何といても、一定の期間、陸上という我々の日常生活空間を離れて、いわば非日常的空間で生活するというところにあるように思います。日常生活している環境を離れるということは外国旅行によっても味わうことが可能ですが、外国の都市には電話も通じまずし、新聞もありますし、テレビも見られるといった具合に、何か日常生活のパターンのなかで、少しばかり毛色の変った生活ができるということだけで、外に出れば建物と乗物と多数の他人と生活時間とがついて回ります。

大自然のなか、未開の地に赴くならば格別、なかなか非日常生活のなかに長時間存在することは難しいことです。航空機のなかの空間は極めて限定的ですし、短時間のうえに人の触れ合いまでは広がりがありません。



非日常的空間を演出する船旅。



大自然のなかを走るクルーズ船。

これらに比べると、外航クルーズ客船の旅は非日常性という点で大変恵まれているように思います。まず日常の情報からの隔絶を第一の楽しみとして挙げなければなりません。もちろん船舶電話というコミュニケーションの手段はありますが、これは使わないと心に決めて掛ります。船内職員用のファックス通信にもアクセスすることも諦めます。テレビの画面にCNNのニュースを探り出す努力はしないことにします。

そして、出発地（必ずしも乗船地とは限りません。フライ・アンド・クルーズの場合のように）から帰着地まで、船内情報、訪れる現地的一般情報以外の情報を突き放すことです。これによって、情報過多に悩まされ、疲れさせられている日常生活とは異次元の空間に存在することが可能になります。必然的に、このクルーズの期間中に生じたであろう日常的儀礼を欠くといった事態に直面することになるかもしれませんが（私の経験でも2週間のクルーズ中に3人の方の葬儀を欠礼することになりました）、「クルーズ中でした」と謝れば大抵の場合、許していただけるのが通例のように思います。航海中に本船の船舶電話や無線通信、ファックス信がバンク状態になるようなことは、もってのほかの現象だと思いません。



華やかな船長主催のパーティー。

クルーズ船内で開催されるダイビング教室。



## II. 船内の生活

クルーズ客船の旅を楽しむ条件として、夫婦（または親子）で乗船すること、親しい（または親しくなれる）仲間と一緒に出かけることが必須のように思います。夫婦で乗船するという事は、24時間夫婦が同じ空間に生活するという点で、またそれが一定期間継続するという点で、非日常的なことだといえますが、それでなお、ご婦人にとっては、家事から解放されるという非日常性が附加されます。

そして、船内イベントへの参加という形を通じて、夫婦で共に楽しむ時間をいろいろな形式で共有できるという非日常的状况を作り出すことができるわけです。しかし、夫婦だけですべてのイベントを共に楽しむというパターンだけでは、時に疲労することもあるでしょう。

食事を楽しむためにも、会話の広がりが必須ですし、女性のためのイベント、男性が楽しむためのコースも存在しますから、そのときは、やはり気の合った仲間・相棒が必要になるのです。船内で仲間を捜すというみちもないではないでしょうが、それ自体がわずらわしいことですし、何といても、共通の話題や共通の趣味・好奇心をもっている仲間と連れ立っての旅こそが、クルーズを楽しくしてくれる秘訣のように思います。

船内生活では、非日常性を大いに追求することです。船内の食事——そして特にワイン——は非日常的ですし、タキシードやイヴニング・ドレスに装ったパーティーや食事は、私たち庶民にとっては極めつけの非日常的現象です。このような機会は、積極的に楽しまなければなりません。

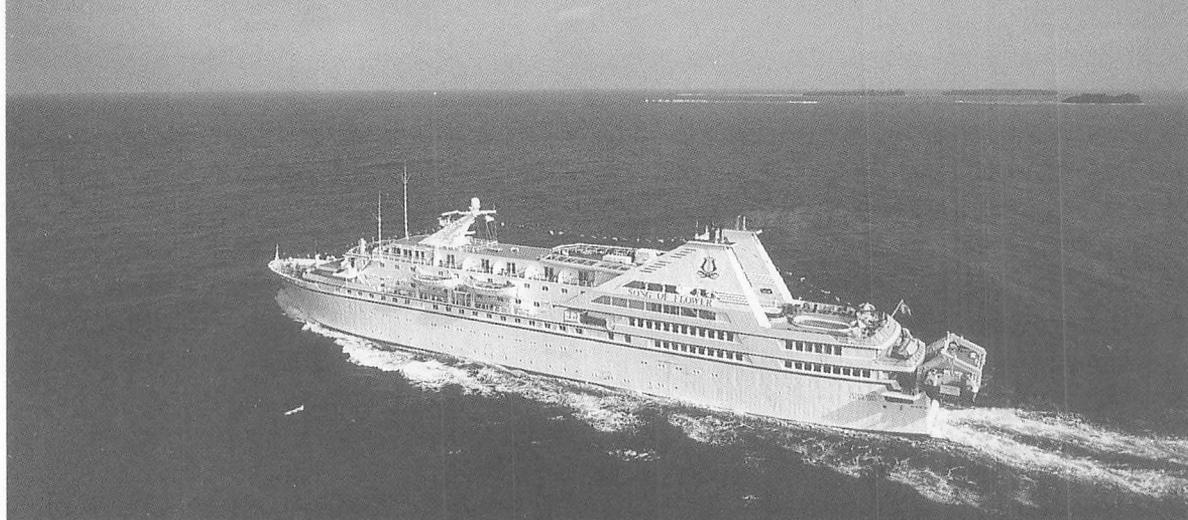
## III. 寄港地のイクスカーション

船のなかで過ごし、大海原を航海すること自体が十分、非日常的空間を作り出してくれますが、クルーズ客船の旅の楽しみは、寄港地ごとのイクスカーションや、海と親しむマリン・スポーツへの参加に負うところも多いように思います。

クルーズの目的・性格によって、提供されるアイテムはさまざまですが、それぞれクルーズならではの味わえない内容を含んでいると信じて、積極的に参加することです。私自身、シュノーケリングやカヌー漕ぎ、またヘリコプター旅行、水上飛行機への乗機など、クルーズに参加して初めて味わった楽しみはたくさんあります。何よりも、好奇心を持つことが必要条件だともいえます。

## IV. 余暇は作るもの

わが国における外航クルーズ客船の旅は、まだ緒についたばかりですが、わが国が余暇時代を迎えたとはいえ、まだまだ外航客船時代といわれるには、十分な余暇が確保できない社会的環境が蔽として存在するといわれることがあります。しかし、私の意見では、余暇は与えられるものではなくて、自ら作り出すものと確信しております。世間的には多忙を極めるといわれている私でも2週間のクルーズ客船の旅を楽しむ余暇は作り出せるのです。すべからく余暇を作って、外航クルーズ客船の旅を楽しもうではありませんか。



「船は相当揺れるもの」と覚悟して参加した3泊4日の船旅であったが、トロピカル・クルーズの海は静かで穏やかだった。

それまで、日本でも外国でも機会さえあれば湾内や河下りのクルーズなどを楽しんでいたが、船では泊ったことがなく、国から国へと旅したこともなかった。

こんな私にとって、東南アジア客船旅行視察団の一員として体験した今度の船旅は、よい勉強になり、多くの思い出を残した。

フライ&クルーズで先ずジャカルタに飛び、そこからシンガポールまで乗ったソング・オブ・フラワー号はヨーロッパ調の豪華船。私のキャビンは淡いブルーを基調にした内装で、一流ホテル並みの設備であった。

カーテンの外を眺めなければ海にいるのを忘れる程に、船は静かに進んだ。やがて速度を上げると、夢のなかで揺り籠に揺られるように緩やかでなだらかなリズムとうねりが生まれるのだった。

## のんびりと過ごした

### 南の島のくつろぎの午後

ジャカルタを出航した最初の晩は、夕食の後、優雅なキャビンで多彩なイベントのプログラムを独り眺め、好きなものだけ参加すればいいという自由さ

をしみじみありがたいと思った。

そうして、とうとうその晩は、船上での国際電話の威力を十二分に試すことになった。実は、留守宅の父が思いがけなく交通事故に遭ったとジャカルタで聞かされていたからである。

翌朝には、やっと東京の状況も判り、船旅だけは続けられることになったので、すぐ気持ちを切り換えて、この船旅の機会を大切に生かすことにした。

そこで早速、テンドーボートでブロスリブ・マリリゾートのティムール島に上陸するグループに仲間入りした。熱帯樹の葉陰で野趣豊かなバーベキューを味わい、船に帰る時間までのんびりと南の島でくつろぎの午後を過ごす。こういう島への上陸は、東南アジア客船旅行を一層魅力あるものにするだろう。

その夜、ディナーの後で仮装舞踏会があった。欧米の映画などでは、こんな場面で大ロマンやサスペンスのドラマが盛り上がる。私も一度でいいからクレオパトラにでも扮して仮装舞踏会に行ってみたいと、前から夢見ていた。

だが、その晩、「豚」のマスクをつけてばら色のスカートをひるがえし、踊りに汗を流していたのが私だった。そして、愛らしい美女として満場の拍手を浴びていたのは、わが視察団の松井団長（大阪商船三井船舶専務取締役）であった。

## クルーたちのプロ意識が 私を本物の船旅ファンに

翌日、太陽の輝くサンデッキでは、ゴルフのスイング・レッスンを受けて、地上では気づかなかった悪い癖を知った。また、粋なパラソルの日蔭でシーフードのピュッフェ・ランチを味わいながらのファッション・ショーも楽しめた。

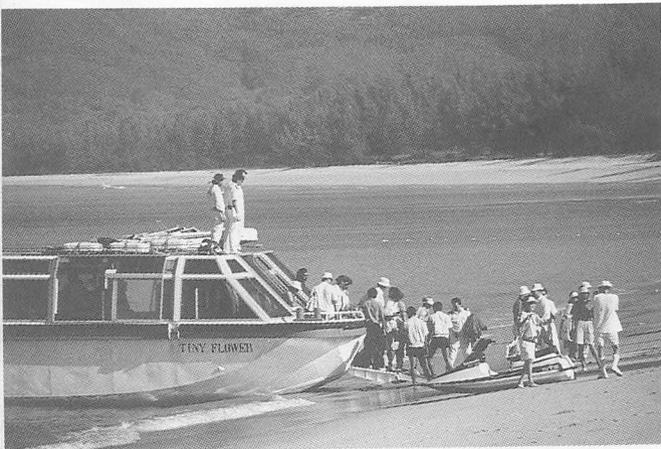
その夜は、客船旅行のハイライトのフォーマル・ディナー。去年横浜でもお逢いしたノルウェー人のキャプテンのテーブルであった。おいしい料理にはワインが似合うが、ノルウェー船籍の船にふさわしいスカンジナビア産アクアヴィットで乾杯して、七つの海に生きる男の話に耳を傾けた。

ディナーの後のショーやダンスは、大勢の乗客が楽しんでいた。船のなかは国際的な社交の場である。東南アジアの裕福な家庭なども見受けられたが、新婚旅行の若い日本人や、旅慣れて英語のうまい中年の日本女性たちも自然な形で楽しそうにイベントに参加していた。

そして、「乗客を楽しませること」にプロ意識を燃やすクルーの気配りとサービスが、私たちの船旅をいつも快適なものにしてくれた。

このように船旅を楽しんだ私も、いざシンガポール上陸時には気がせいたのか、衣類7点をキャビンに置き忘れて、川崎汽船の方に日本でまたまたお世話になった。

今度の船旅のいろいろな体験は、私を客船旅行のほんもののファンにってしまった。



テnderボートでの上陸風景。

## 晴海客船ターミナル

# 船旅の魅力あふれる 海と港の文化基地

## 東京都港湾局

東京港は、都民生活や都市活動を支える物流ターミナルとして大きな役割を担い、コンテナ船をはじめ多数の貨物船でにぎわっております。

一方、近年、ゆとりとうるおいに満ちた船旅への関心が高まり、新しいレジャーとしてのクルーズが、都民、国民に身近なものになりつつあります。わが国では、本格的な外航クルーズ客船が相次いで就航し、東京港の景観に花を添えるところとなっています。

東京港におきましては、こうした港の新しい動きにこたえ、また、都民に親しまれる港づくりをすすめていくために、晴海ふ頭に港と都民の交流の拠点となる客船ターミナルを建設いたしました。

この客船ターミナルは、船客乗降用の施設のみならず、展望台、ターミナルギャラリー、多目的ホール、レストランなどを備え、一般の都民の皆様が気軽に立ち寄り、ふれあうことができるようになっています。

東京港開港50周年にあたる本年5月オープンの際この施設が、多数の客船と人々にご利用いただき、海と港に親しむ文化基地としてにぎわうことを期待しています。

さて、それでは個々の施設ごとに簡単なご紹介をさせていただきます。

まず、1階は長い船旅に出る人、長い船旅から帰る人、そして途中寄港する人と、様々な出会いが繰り広げられるメインエントランスホールです。この部分にはゆとりのあるスペースを確保して、交流にふさわしい場といたしました。また、軽食喫茶のスペースも設けられており、楽しい語らいのひと時をお過ごしてできるようになっております。隣接して、大型車15台、普通車70台の駐車場も確保しております。

2階は待合ロビーで、乗船客や送迎の人々、あるいは一般都民の皆様がゆったりと語らいくつろげる場としてご利用いただけます。ウォーターフロント

計画によって移り変わりゆく新しい東京港の景観は、きっと訪れる人々の旅情をお慰めすることでしょう。また、外航客船の入出港時に入国審査や税関等の検査を行うコーナーもあります。

## 21世紀に向けた 国際交流の海の玄関口として

次は、船旅のドラマのステージでもあります3階の送迎デッキです。船旅の魅力のひとつには、テークが結ぶ感動のひとつときがあります。ここはそうしたドラマのステージとして、客船の入港時のお出迎え、出港時のお見送りの場としてご利用いただけます。さらに、潮風とふれあいながら、集う場としても好適です。

4階には、人々が出会う場にふさわしくさまざまな目的にご利用いただけるターミナルホールがあります。講演会に、会議に、あるいは港にちなんだ音楽の集いなどとして、収容人員は400人(イスとテーブル)から600人(イスのみ)まで自由なスペースレイアウトをしていただけます。また、スライディングウォールを開くと東京港連絡橋の全景が見渡せる

ように設計されています。

5階は、旅の憩いと眺望が満喫できるレストランです。四方をガラス張りにし、どの席からでも眺望を楽しめるように、ゆるやかな段差をもうけた構造となっています。眺望を楽しみながらお食事をしていただける、東京港の新名所としてお気軽にお立ち寄りください。

6階は東京港についてのさまざまな情報を紹介するコーナーです。目の前に展開する、世界に開かれた東京港について、マルチスライド映像と、心地よい音楽のなかで得られる知識は、きっとあなたの興味を倍加することでしょう。また、屋上は展望台として360度東京港はもちろん、都心内陸部なども見渡すことができます。ここからの景色は大都市東京の新しい魅力を見せてくれます。

このように皆様に親しんでいただける新しい東京港のシンボルとして、また、国際港として、晴海客船ターミナルは大きくはばたきます。スピードを優先した、航空機による旅行とはひと味違った、ゆったりと、うるおいのある旅行を楽しむ人々のニーズは、21世紀に向かって増え続けると思われます。晴海客船ターミナルはそうした海の玄関口として、世界各港を結ぶ国際交流の拠点となります。

## 協会だより

### ■本年10月「飛鳥」就航

会員は、平成3年4月1日現在、正会員20社。賛助会員は72社の合計92社ですが、目下地方自治団体の加入手続きをすすめておりますので、近々会員数は100社に達する見込みです。協会所属の外航客船は、外航定期旅客船が8隻・48,201総トン、不定期のクルーズ客船は、11隻・181,156総トンとなっております。なお、本年10月に「飛鳥」(27,000総トン)584名乗クルーズ客船が就航します。

### ■将来のクルーズエリア、 ソ連・極東地域へ調査団派遣

当協会の調査広報委員会は、平成3年度の外航客船の海外拠点・調査地域は将来クルーズエリアとして有力視されているソ連・極東地域とすることを決定した。調査団派遣日程は、平成3年8月31日から9月9日までの11日間で、大陸およびサハリン地区を調査することにしております。調査団員は、会員を対象に募集します。多くの方の参加を期待しております。

### ■コードの標準フォームを制定

当協会は運輸省の通達に基づき、安全運航コードと利用者保護コードを、自主規範コードとして採用し遵守することを決定しておりますが、遵守励行を徹底させるため、安全運航コードで定められている運航管理規程・運航基準・作業基準・事故処理基準・船舶保安管理基準に関しては、当協会はこの標準規程を作成しました。さらに利用者保護コードについては、このコードに則った標準旅客運送約款を制定しました。説明会を開催し、安全運航コードの標準規程・標準旅客運送約款の普及に努めることにしております。

### ■7月20日“クルーズシップ フェスティバル'91”開催

昨年、7月20日の海の記念日には日本船主協会などと小学校・中学校生徒を対象に、作文コンクールを実施し、当協会は運輸大臣賞受賞者を小笠原クルーズに招待しました。今年は、5月23日にオープンした晴海客船ターミナルを会場に、7月20日午後1時より“クルーズシップフェスティバル'91”と題して、講演会、客船見学会、写真撮影会など数々のアト

ラクションを織り込んだ祭典を、運輸省、東京都港湾局の後援のもとに実施することとしております。講演会には評論家の犬養智子氏が出演するとともに豪華客船の5船長も登場しトークセッションを行うなど多彩な催し物を行うこととしております。

### ■海の記念日前夜祭に ハンドブック寄贈

海の記念日の前日7月19日には、日本船主協会、全日本海員組合による前夜祭が、新橋駅前広場で行われます。この前夜祭に当協会は後援を行うこととなり、“マリンプルーファンタジー”を500冊寄贈することとしております。

### ■客船のハンドブック 好評につき残部2,000

客船のハンドブック“マリンプルーファンタジー”は1万部印刷し、関係方面に広く頒布しております。好評につき既に7,000部配布しました。海の記念日には1,000部使用しますので実質残は2,000部程度になりました。有効活用にご協力ください。